
とある鍊鉄の英靈が為す物語

哀鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある鍊鉄の英靈が為す物語

【Zコード】

Z7235Z

【作者名】

哀鈴

【あらすじ】

英靈エミヤは、科学の街、学園都市へと至る。

発達した科学、それによつて生じる超能力。そして、元の世界とはちがう在り方をした魔術師たち。

自身の理想の果てに摩擦しきつた彼は、この世界で何を為すのか。科学と魔術が交差するとき、物語は始まる。

ところが、HIIYANO禁書の世界です。

多作品に比べ、HIIYANOと禁書のクロスが少ないと思ったので、書いてみました。

初投稿ですので、設定が甘かったり、文章が拙い部分が多くあると思いますが、よろしくお願いします。

鏡の世界 (繪畫)

まいじくお願ひしあ。

剣の世界

『…呼ばれている。』

無限の剣が乱立する荒れ果てた荒野で、男は自身が今までに喚び出されようとしていることを悟った。

『しかしこれは…？』

「この召喚は、守護者として喚ばれる時とも、聖杯戦争でサーヴァントとして喚ばれる時とも異なる。

いや

そもそも喚ばれるところよつは、道が開く、といった感覚に近い。

『しかし、どうであれ、私がこれに抗つことができないのところに、変わりはない』

男は口端を皮肉気に呑める。

『ならば、せめて、向ひでは精一杯足搔く」とことよひ』

そして、光がはじけた。

男は消え、残つたのは荒れ果てた世界だけ。

ただ、世界を覆う朱い歯車が、廻り続けていた。

無限の剣は黙したまま、担い手を待ち続ける。

第1話

学園都市

東京西部に位置し、総面積は、東京都の約3分の1に相当する巨大都市。

都市の周囲は壁に囲まれ、専用ゲートと空路を除き、出入りする方法がなく、外界から隔離されている。

さらに、その高い化学技術と生活水準は、学園都市の内と外では、数十年以上の技術の差が存在しているとまでいわれるほどである。

総人口は230万人ほどであり、その8割は学生、それぞれが能力開発をうけている。

能力開発とは、脳を開発して、超能力を発現させることを目的としたものだ。

事実この都市の中では、能力者という存在が、あたりまえに存在している。

そんな都市内の、とある学区に建つ、窓も、入口さえも存在しないビルの中。

液体に満たされた巨大なビーカーの中に、一人の『人間』が浮かんでいた。

男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』。

学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリー。

最先端の科学技術を持つた都市の街の長の視線の先には、一人の男がいた。

年齢は、高校生くらいだろうか。鍛えているのであらう、服の上からでも、全身に程よく筋肉がついていることが窺える。

特徴的なのはその短髪。銅が錆びたような赤い色をしている。

そして、なによりも目につくのは、その瞳である。男の年齢には

ふさわしくない、まるで鷹のよつに鋭い目。
その瞳が、彼が只者でないことを表している。
そして、男が口を開いた。

「さて、アレイスター。これは、どうしたことだ？」

「どうこう」と、とは?」

「とほけるな」

男が、アレイスターを射殺さんばかりに睨みつける。

しかし、その目に睨みつけられているにもかかわらず、その表情
はまったく変わらない。

「これのことだ」

男は眉間に皺を浮かべながら、自分の手の中にある赤いコートを
指さす。

「なぜ私の聖骸布の外套が、こんなコートになつているんだ…」

男はもともと、ある聖人の聖骸布でつくられた赤い外套を、身に
まとつていた。

しかし、それは現在、現代風のロングコートと化している。

「とはいっても、君のあの外套は、装着が面倒だろ？
だから、少しばかり手を加えてみた。」

「手を加えてみたつて…」

男は痛むこめかみを抑える。

たしかに、もともと男が着ていた外套は、上半身と下半身で別れており、少しばかり着るのが面倒であった。
とはいっても、長年身に着けている、何度も自分の命を守ってくれたものである。

勝手に手を加えられて、いい気はしない。

「安心したまえ、学園都市製纖維を使い、性能を変えない」となく、
そらに防御力をあげることに成功している。」

「…そうか」

「やしてせりひよせ」

「もうここ

「これ以上聞くのも面倒だし、そもそも今は夏。そつ着る機会もないだろう。」

そう思い、男はため息をついた。

そして液体の中に、目を向ける。

「では、私はそろそろ行くところだよ。」

「ああ、行くといい。この街が、君に合つうことを願つてゐるよ。」

しばしの沈黙、そして。

「…アレイスター。」

「なんだ？」

男の視線が、より一層鋭くなつた。

「貴様が何を企んでいるのかはしらないが…、すべてがうまくいく
と思うな。」

「…とこうと？」

「貴様のいう『計画』に、おそらく私も組み込まれているのだろう。
だが、そう簡単に私を利用できるとは、思わないことだな。」

「…心得ておくとしよう。」

ビーカーの中の『人間』は、無表情のままそつ答えた。

「では、さりばだ　　『魔術師』アレイスター・クロウリー。」

「ああ、君に幸運を　　衛宮士郎、いや、『英靈』ミミヤ。」

しかし、鍊鉄の英雄は、学園都市へと至つた。

科学と魔術が交差するとき、物語は始まる。

第2話

英靈HIMIYAが、学園都市に降り立つたのは、数日前の「」である。

彼が最初に目にしたのは、数多くの機械だった。

見たこともない技術の使われているさまざまな機械。そう、『機械』である。

これを見たエミヤは、まずこの事実を訝しんだ。

『機械』とは、一般的に考えて、『科学』と結びつくものである。しかし、呼び出された自身は、魔術的な存在。

英靈であり、抑止の守護者。

よつて、自身を呼び出すためには、魔術的な儀式が必要である。

しかし、この場にはそのようなものではなく、周りに見えるのは、科学のモノのみ。

果たして自分は、どのような理由で「」にいるのか、HIMIYAがそのような疑問を持つことは当然のことである。

side EMIYA

私は、ショックをうけていた。

再び、あたりを見回す。

空中に浮かんだモニター、次から次へと無数の数字を処理し続ける小さな箱のような機械、ランプが点滅を繰りかえす大量のコードにつながれた強大なコンピューター。

少し見るだけでも、ここが、かなり科学技術の発達した場であることがうかがえる。

「（場違いだな……）」

なんてことを呆然としつつ考える。

しかし、なにも自分は、まわりが機械ばかりだからとか、魔術の気配を感じないからといった理由で、ここまでショックをうけているわけではない。

問題は、自分の姿姿にあった。

電源のはいつていらない暗いモーターに映った、自分の姿を見る。

服装は、普段と同じ。黒のアーマーに、赤い聖骸布の外套を羽織つている。

ここまででは問題ない。

しかし…

「衛宮士郎…だと…」

そう、今の自分の姿は、自分が過去、衛宮士郎であつた時の姿なのである。

自分の本来の姿は、白い髪に褐色の肌、身体は20代後半くらいのものであった。

だが、今現在は、銅が錆びたような色の赤い髪に、日本人らしい肌の色。そしてなにより、高校生くらいの身体だ。

「……なんですか……」

さりに続けて自分の身体の中身（構造）を、見る（解析する）。

「……」

自身の能力は、英靈時と変わりはない。

魔術回路は27本正常稼働しており、魔力量も十分にある。若干体が縮んだことにより、筋力などが落ちてはいるが、反面、手足が短くなつたことで、小回りが利くなどの利点も生じることから、気にする必要はないだろう。

そして、完全に受肉していた。

……だから……なんですか。

とりあえずこれについては保留した。

自身の状態の確認を終え、一息つく。

それにもしても、存在を消したいほど憎んでいるかつての自分の姿になるとは、なんと因果なことか。

そう独白しつつ、とりあえずこの場を離れようとしたところで

バチンツ

そんな音とともに、周りの機械が一斉に停止した。
それと同時に、切り替わるモニターの映像。

そこに映っていたのは、一人の『人間』だった。

その容姿は、奇妙なことに、男にも女にも、子供にも老人にも、
聖人にも囚人にも見える。

自然、警戒を強める。

そしてそれは声を発した。

「ようこそ、『来訪者』。私の名は、アレイスター・クロウリー。
この、学園都市の統括理事長だ。」

その名にひどく驚いたが、それを表情には出さず、私も答える。

「挨拶してくれるのはありがたいのだが、何分私は、状況が把握で
きてない。

できれば、説明をしてもらいつとありがたいのだが。」

「わかっている。だが、そのまえに一つ質問がある。

君は、いつたい『何』だ？」

その質問が、名前などを聞いているのではないことを理解する。だが、こちらも簡単に素性を明かすわけにはいかない。

「ただの一般的な人間だが？」

それを聞き、彼（おそらく男だろう）、アレイスターも言葉を返す。

「それだけの魔力を内包しておいて、よく言ひ。」
その言葉に、私は内心驚いたが、それを表情に出さずに、話を続ける。

「魔力…、わかるのか？」

「以外かね？」

「いや、」Jのよつて機械が多くあるとな…」

「なるほど。たしかに、科学と魔術を結びつけるのは難しい。私が魔術を知らないと思つてもおかしくないだらう。」

「では、おまえが私を呼び出した魔術師なのか？」

「私は魔術師などではない。少なくとも、今はな。そして、君を呼び出してなどはないが、」Jにいる原因はおそらく私達にあるの

だらう。

…とおりあえず、私が話すのはこれくらいだ。では、先ほどの質問に答えてくれるとうれしいのだが。」

先ほどの質問、私が『何』なのか。

とりあえず今は、話す以外の選択肢はないのだろう。

「私は、英靈だ」

「英靈、とは？」

「英靈とは、簡潔に言えば、生前英雄だった者のことだ。

英雄のなした功績は、神話や伝説となり、それは信仰を生む。

その信仰をもつて人間靈である彼らを精靈の領域にまで押し上げたのが、英靈だ。」

「……なるほど。しかしらの定義とは多少異なっているな。話を続けてくれ。」

「……ああ。そして、英雄は死後、英靈となり、完全に現世と切り離された、『英靈の座』へと運ばれる。」

「英靈の座？」

「そう、英靈となつたものが至る場所だ。」

「なるほど。」

そこで、しばし両者は共に無言となつた。

私は、これ以上の情報を、現時点で明かす必要がないと考えて。アレイスターも、なにかを思考しているようだ。

やがて

「なるほど!…、だいたいのことは理解した。
だが、最後に一つ聞かせてもらおう。」

「なんだ?」

「『英靈』だとこいつのならば、君も歴史に名を残す『英雄』なのだ
るひつ…

では、君の名は、なんといつ?」

「…あいにく、私は特殊な英靈でね…。
名なんでものは、ほとんど知られていないのだよ。
だから聞いても、それにはまる英雄は存在しないだろうが…。
私の名は、ヒミヤといつ。」

「…ヒミヤか。なるほど。これでいかから質問はおわりだ。」

そうこうしてアレイスターは黙った。

「ならば、次は私の番だ。なぜ、私はここにいる?」

「それは、我々の行つた実験の結果だ。」

「実験?」

「AIM拡散力場を重ね合わせることによつて、別の『界』をつくる実験だ。」

「JINで、聞きなれない言葉が出てくる。

「AIM拡散力場とは?」

「能力者が無自覚には発してゐる微弱な力場のことだ。能力者については、あとで説明しよう。」

とにかく、その力場を使って、私は新たな『界』を作ろうとした。結果として、確かに、『界』のようなものはできたが、それは不安定であり、また、稀薄すぎるものであり

私は、実験は失敗と判断し、その『界』の維持を解いた。だが、想像に反して、『界』は消滅せず、さらに、どこか別の『界』へとつながった。

そして、そこから現れたのが、君だ」

「…なぜ、そこから私が?」

「おそらく、その英靈の座、と呼ばれる処へとつながつたんだろつ。ちなみに想が出てきた後、『界』は完全に消滅した。」

「…なるほど。」

「ずいぶん突拍子のない話だ。」

しかし、ほかに信じるあてもない。

「なら次だ。JIN 学園都市といつたか についてと、さあほどの能力者について聞かせてもらおうか。」

「ああ、学園都市とは　　」

そして、アレイスターの話は、私の予想の範疇を大きく超えた話であった。

第3話（前書き）

自分の書いた話を読んでいただけたのは、嬉しいものですね。
本当にありがとうございます。

第3話です

第3話

学園都市へ至つてから1日が経過した、
HIIヤは一人、物思いに更けている。

昨日、アレイスターからされた話は、想像を軽く凌駕するものであつた。

学園都市、能力開発、風紀委員、警備員、樹形図の設計者、超能
力者^{ペル⁵}：
：

HIIヤにひとつまわしくそれは驚愕であった。

外との何十年もの技術格差もそうだが、なにより驚いたのは能力者の存在である。

学生のほとんどが能力開発を受けており、さまざまな力をもつている。

学園都市に7人しかいない超能力者^{レベル⁵}に至つては、軍隊を一人で相手にできるとまでいわれているそうだ。

能力によつては、英靈さえも打倒しうる。

その事実は、恐るべきことであつた。

「（またなんといつか、すごい世界に来てしまつたものだ…）」

そう思いつつ、HIIヤは自分のこれからを考える。

アレイスターが言つこは、HIIヤには今後、学園都市で生活してもらつそうだ。

英靈とはいつても、今は完全に受肉しており、生身の人間とほとん

ど変わらない。

よつて、学園都市で生活しても問題はないらしい。

しかし、そのかわり、ヒミヤは、風紀委員のよつた仕事が課せられた。

内容は

- ・能力者同士の争いの鎮圧といった、治安維持活動。
- ・要請があつた場合の、風紀委員、並びに警備員の支援。

といったよつたものである。

ヒミヤは、手元にあるカードを見る。
ライセンス（証明書）と呼ばれるそれは、アレイスターに渡された
ものだ。

これがあれば、風紀委員や警備員の施設にはいることができる、また、
自分の身分の証明にもなるらし。

そこに書いてある、自身の名前。

『衛宮士郎』。

姓名が必要であり、偽名を特に思いつかなかつたヒミヤは、不本
意ながらかつての自分の名をそのまま使つた。

今現在の彼は、紛れもなく、衛宮士郎、なのである。

「はあー……」

ため息をついた。

さて、彼、英靈エミヤが、衛宮士郎だつたころの姿に戻り、また、

再び衛宮士郎といつ名前を手に入れた。

精神は肉体に引っ張られる。そして、名前といつものもまた、その存在に影響を与える。

結果、彼は、根本が英靈エミヤであるといつては変わりはないが、やや衛宮士郎といつかつての自分に近づいているといえよう。さしづめ、エミヤでも衛宮士郎でもなく、エミヤシロウといったところか。

そんなエミヤシロウ、以下シロウは、昨日から今日にかけて、ネットや書籍などを活用し、学園都市についての一般知識を身に着けることに励んでいた。

一晩以上勉強をし続けた甲斐もあって、今では、学園都市で生活する上で、必要最低限の知識は身に着けている。

そして、あることに気付いた。

学園都市のトップである、統括理事長アレイスター。

彼についての情報が、まったくといっていいほどなにもないのである。

経歴、年齢、なにもかもが不明であり、どう考えても、情報が隠蔽されている。

アレイスター・クロウリーといつ名前は、魔術師にとって特別な意味を持つ。

その名は、世界的に知名度の高い魔術師の名前なのだ。

数々の独自の魔術を生み出し、また、「靈的な叡智」と呼ばれる、天使に近い存在とのコンタクトに成功したとまでいわれる大魔術師。仮に、この世界にも「魔術」と呼ばれるものが存在し、「魔術師」が存在するのであればおそらく、魔術師としての、アレイスター・クロウリーは、この世界にも実在していたのだと思う。

ならば、JRの学園都市の頂点に君臨しているアレイスター・クロウリーとはまたして、どのような関係なのか。

そう疑問に思い、モニター越しに聞いてみたところ

「…まあ、誰のことなのかわからないな。それよりもエミヤ、君の来ていた聖骸布のコートを少し貸してもらいたい。

その対魔力性は、実に興味深い。」

などとはぐりかされた。

魔力、などと口にしてることから、魔術とは無関係でないことはわかるが、それ以上はなにもわからない。
アレイスターの顔を見ると、無表情なのに、どこか笑みを浮かべているような気がした。

その後彼は、空間移動系能力者の手によって、窓のないビル内に送られ、アレイスターと直接話をした。

そして現在、話を終えたシロウは、自身が住むことになった建物に向かつて歩いていた。

日は既に西に傾きだしており、夕日が街を、茜色に染めている。

「（それにしても、やはり、JRの街はすごいな……）」

彼が今いるのは、第7学区。

学園都市のほぼ中央に位置し、学校や学生寮など、主に学生の生活のための設備が集中している学区だ。

今も、学校帰りであるう夏服を着た生徒の姿が多くみられる。

自販機の前でジュースを買い笑い合っている生徒。暑いからか木陰で涼んでいる生徒。建物の隙間でこっそりとたばこを吸っている生徒。。。

ここまで聞けば、普通の街で、当たり前のようにもみられる光景だろう。

しかし、能力の存在が、それを当たり前でなくしている。

自販機の前で話をしている少年の前には、何もないのにふわふわと宙に浮いているジュースの缶が。

木陰で涼んでいる生徒のまわりには、そこにしか吹いていない風が。たばこを咥える生徒は、自身の指の先から出る小さな炎で火をつけている。

これが学園都市。

超能力の実在する街である。

「（そしてこの発達した科学技術）」

街中を、ドラム缶のような形のした清掃ロボットが動き回っており、ごみを片つ端から回収している。

飲食店の前には、ホログラムの料理見本が。

そして、空に浮かぶモニターのついた飛行船。その画面には、今日の日付と、明日の天気とが書いてある。

シロウは、そこに書いてある文字を読み取る。

「（今日は7月10日、明日の天気は5時から晴れ、7時から弱雨、あとは夜まで晴れ…か。確率もなにもない。これが天気予報ならぬ天気予知か…）」

学園都市は、その科学力をもつてして、天気予報を確実なものとしている。

これが、もはや天気『予報』でないことから、学生達からは、天気『予知』といわれている。

「（本当におそるべき科学力だな…。）」

そんなことを思いながら足を進める。

そして、視界にクレープを食べている女生徒をとらえたところでは、あることに気が付いた。

「（飯…どうするか）」

受肉しているとはいって、彼は英靈である。

数日なにも食べなくても、十分に活動できる存在である。

しかし、それはなにも食事を摂らないといつわけではない。

英靈だって眠たくなるし、腹も減るのである。

まあ、それは気持ちしだいでどうにでもなるのだが。

「（ここにきてからまだ何も食べていないしな。晩の食事くらい作るか。）」

そう思ふシロウは、近くにあったスーパーマーケットに向こう。

「（でもやはり学園都市はすさまじく、あらゆる国の野菜やら魚やらが並んでいた。）

その食品の数が、シロウの料理人魂（？）を刺激するが、いまは我慢する。

軽めに焼きそばでも作ろうと思いつい、野菜と麺、調味料を買い物かごにいれ、レジへと向かった。

アレイスターにもらつたクレジットカードで支払いをする。アレイスターが言つには、シロウの口座にはあらかじめ生活に困らないレベルの金を入れておき、仕事をこなしたりした場合、その分の報酬が振り込まれるようになつてゐるそうだ。

せりに、いちおう学生扱いであることから、補助金が月1で入るらしい。

支払いを終え、シロウは自身の家へと向かつ。

食品の入つた袋をぶら下げながらしばらく歩いていくと、やがて、その建物が見えてきた。

3階建てにしては縦に長い、1つの階に2部屋のマンションである。できたらばかりで入居者はまだいないらしく、シロウが初入居者らしい。

とりあえずシロウは、自身に当てられた部屋へと移動する。

2・1号室。それが、シロウの部屋だった。

持つていた鍵で、ドアを開ける。

中は1人で住むには、少しばかり広い部屋だつた。

玄関を抜けた先にあるのは、ダイニングキッチン。

そしてその向こうに、寝室がある。

また、ベランダがあり、洗濯物などを干せるようになつている。

洗濯機や水道、冷蔵庫などは元からあるが、他には、白いソファーを除いて何もない。

「これは、明日にでも家具を買いに行かないとな……」

そう呟きつつ、キッチンへ向かう。

火が通つてることを確認し、食材をだす。

そして気づいた。

「しまつた……。調理器具がない。」

不覚にも食材ばかりに目がいつていて、調理器具や、食器の「」など考えていなかつた。

少し考えて

「仕方がないか。」

自身の魔術を使ふ。

トレス・オン
「投影開始」

魔術回路に撃鉄を下し、想像するは調理器具一式。そして目。

「」に今、幻想を結ぶ

すると、シロウの前に、研ぎ澄まされた包丁と、まな板、鍋、そして食器が出現した。

これがHミヤシロウの魔術『投影』。

自身のイメージした物を、魔力で再現する魔術。

本来ならこの魔術によって生み出されたものには、世界の修正力がはたらき、時間がたてば消滅してしまう。

しかし、シロウの行う投影は、とある理由のため例外であり、投影したものが壊れたり、もしくはシロウが自ら破棄しないかぎり、永遠に存在し続ける。

「それにしても……」この世界において最初に行つ魔術がこれと云ふ……

自身が投影したものを前に、シロウは、すこしむなしさを感じた。

第4話（前書き）

かなり多くの方に読んでいただけているようですが、驚きました。

…いや、本当に驚きましたよ…。

楽しんでいただけているのであれば幸いです。

とこりわけで第4話です。

全話に比べれば短くなつておつますが、『じつ承くださ』。

次の日の朝、シロウは第2学区へと来ていた。

第2学区は、ジャッジメント風紀委員や、アンチスキル警備員の訓練所、そのほか、兵器の試験場などといったものが、集中している地域である。

よつて、必然的に騒音が多く発生するために、この学区はまわりを特殊な防音措置の施された壁で囲まれている。

そしてシロウは、この学区内のある訓練所内にいた。

服装は、黒のTシャツにジーンズというカッコな格好であり、両手に双剣を持っている。

その剣は、神秘を内に秘めた『宝具』であった。

宝具

それは、人間の幻想を骨子に作り上げられた『物質化した奇跡』である。

例えるなら、おとぎ話に登場する魔法の財宝。神話に登場する神々の武装。英雄譚に登場する伝説の武器。

それが、宝具である。

そして、シロウの持つ剣の銘は、干将莫邪。

中国の伝承に残る夫婦剣であり、シロウが最も好んで使う武器の一つだ。

この剣は、シロウの投影魔術によつて作り出された贋作であり、本物よりもランクは下がっているものの、十分宝具としての力をもつている。

では、なぜシロウが宝具などといふものを持ち、このよつなどこ

ろにいるのか。

理由は単純明快。アレイスターから、来るよつに連絡があつたからである。

どうやら、シロウの戦闘能力を知るために、学園都市製の戦闘プログラムを受けさせる氣らしい。

あまり手の内は見せたくないのだが、英靈としての力をみせろ、そう言われたため、やむ負えずシロウは宝具を投影している。

そして今現在彼は、戦闘の前の精神統一なのか、目を閉じていた。

彼が立っている場所は、施設の中とは思えないほど広く、また、さまざまな障害物が用意されている。

今から彼が行うのは、対軍用戦闘プログラム。

無人のロボットを相手とした、対軍を想定した訓練である。

「では、開始する」

職員の声と同時に、シロウの前方にある扉が開いた。

中から出でくるのは、数多くの無人口ボット。

人型から、空を飛ぶソーサー型まで、さまざまな形のロボットがいる。

それらは皆、なんらかの形で武装をしていた。

戦闘が始まる。

シロウは、閉じていた目を、ゆっくりと開いた。

上からの命令で、戦闘プログラム⁵を行えと指令があつた。
これは、学園都市暗部の戦闘部隊や、超能力者^{レベル5}に向けて調整された
プログラムだ。

今までおれが立ち会つたのは、暗部戦闘部隊『迎電部隊^(スパークシグナル)』、そ
して、学園都市第一位の『未元物質』（ダークマター）による戦闘
だ。

迎電部隊は、その多くが負傷してはいたもののなんとかクリアー。
第二位は、その能力を使うことで、傷を負わずにクリアーしていた。
まあ、聞いたところによると、第一位『一方通行』（アクセラレ
ーター）は、ほとんど動かず一瞬で終わらせたらしいが。

それで、いつたいどんなやつが受けるのかと楽しみにしていたら、
どうやら、学園都市外部から来た人間らしい。
年齢は、高校生くらいだろうか。
赤い髪と、妙に鋭い目が特徴的だ。

てか、学園都市外部？

ということは、あいつは能力者じゃないのか？

そう思つていたら、いきなり奴の手に、白と黒の双剣があらわれ
やがつた。
あれは、中華剣か？
どこからだしたんだあの剣。

やはりなんかの能力か？
だとしたら、外部の能力者とはまた珍しい。
だが、あんな武器を出すなんて能力聞いたこともないぞ。

考えられるのは、空間転移系能力の応用か？

ていうか剣つておい。

なんだあいつ。もしかして、一人で剣使つて戦うつもりか？
ありえないだろ。

あつちには、チェーンソーつけて空中に浮かんでいる奴から、マ
シンガンを装備してる奴までそろつてんだぞ。
それを、あんな短い剣でどうするつーんだ。

：

あいつ、死ぬんじやね？

まあ別にかまわんが。

上層部は何を考えてんだかな。

さて、さつさとはじめちまうか。

side out

そして、残るのは残骸のみ。

数分後、研究者は呆然と田の前のスクリーンを通して、それを見
ていた。

そこに映っているのは、訓練室の風景。

さきほどまで機械として動いていたロボットたちは、今はガラクタの山と化しており、その中心には、シロウが悠然と立っていた。

シロウの強さは圧倒的だった。

研究者は、先ほどまで繰り広げられていた戦いを思い出す。

まず、近接武器を持つた敵を、持っていた双剣で瞬時に切り捨てる。

切り伏せた敵を盾にしながら、銃弾をかいぐり、銃を持った敵を倒す。

時には双剣で、また、時には敵が使っていた銃を使いつつ、そのほかの敵を各個撃破していく。

ただその繰り返しで、シロウは敵を殲滅した。

言つのは簡単だが、実際は、驚異的な動体視力、そして人外的な身体能力がないかぎり、不可能な戦い方。

それを、彼、シロウは實際に行つていた。

能力者特有の、能力に頼った圧倒的な力ではない。

軍隊特有の、数、そして戦略による、大群による力でもない。

個人による、己の培つた技術、そして経験によつてもたらされた、圧倒的勝利。

「あいつ…、いつたいなにもんだよ…」

研究者は、そう呟かずにはいられなかつた。

第4話（後書き）

補足です。

基本、この作品中では、超能力を表記する場合

『一方通行』（アクセラレータ）というように、『』の中に漢字、

その外の（）の中に読み方といつ風にしていきたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7235z/>

とある鍊鉄の英靈が為す物語

2011年12月27日22時45分発行